

日本学術振興会研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）  
中間評価（25年度採用課題）書面評価結果

領域・分科（細目）	人文学・史学（考古学）		
研究交流課題名	北方圏における人類生態史総合研究拠点		
日本側拠点機関名	北海道大学 アイヌ・先住民研究センター		
研究代表者 所属 職 氏名	アイヌ・先住民研究センター・教授・加藤博文		
相手国	国名	拠点機関名	研究代表者 所属 職 氏名
	カナダ	アルバータ大学	Department of Anthropology・ Professor・Andrzej WEBER
	連合王国	アバディーン大学	Department of Archaeology, Professor・Keith DOBNEY

評 価
<p>A 想定以上の成果をあげつつあり、当初の目標の達成が大いに期待できる。</p> <p><b>B</b> 想定どおりの成果をあげつつあり、現行の努力を継続することによって目標の達成が概ね期待できる。</p> <p>C ある程度の成果をあげつつあるが、目標達成のためには一層の努力が必要である。</p> <p>D 成果が十分にあるとは言えず、目標の達成が期待できないため、経費の減額または中止が適当であると判断される。</p>
コメント
<p>本事業の目的とする「我が国と世界各国の研究教育拠点機関をつなぐ持続的な協力関係の確立」においては、カナダならびに連合王国との交流やセミナーの開催など計画通りに良好に遂行しており、安定的な関係が形成されつつある。さらに、本事業以外の共同事業を組み合わせて事業の拡大と継続を図り、交流機関が増加している点では、持続的な協力関係が実現されつつあると評価される。</p> <p>学術的側面については、共同研究 R-1「北方圏における人類文化・環境適応・景観創造」、R-2「北方人類史研究における先住民文化資源の過去と未来」が設定され、セミナーは各年度で S-1 から S-4 ないし S-5 まで設けられ、多様な課題について、精力的に取り組んでいる状況が示されていると全体を評価できる。今後も、礼文島の調査地等、北海道大学のもつフィールドを、共同研究・セミナー・研究者交流の日常的拠点として通年的に運用することでさらに活かし、本事業ならではの具体的研究素材や方法を提示し継続的に進化させていきたい。たとえばこのフィールドでの活動を一つの軸に、提示されている（1）から（5）のキーワードを展開させると、内容についても日本の拠点ならではの特徴が外からより見えやすいのではないだろうか。欧米で数十年をかけて継続する遺跡の発掘調査や、生物の生態観察等が参考になるかもしれない。なお、R-2 については、北方の先史時代狩猟民、先住民一般、アイヌ、の関係について概念的な整理が必要なのではないか。一般に、先史時研究ではそれを担った集団はニュートラルな名辞で呼ぶのが、ヨーロッパ考古学の戦前の学史を踏まえた反省であった。オックスフォード大学考古学研究所で行なったこの種の問題に関連した共同研究の成果は、確実に国際誌に反映されるよう期待したい。</p> <p>若手研究者の育成については、礼文島をフィールドとするセミナーが、大学院の正規のカリキュラムとして制度化されたことは、今後の若手研究者の育成や研究者の交流の活性化と事業の持続性に大きな意味がある。大学院同士の単位互換等も考慮されてはいかがだろうか。今後とも、共同研究、セミナーに参加した大学院生、若手研究者が、参加したテーマ関連で論文を必ず書くようにし、安定的な研究職に就くための一助となれるよう本事業で支援されたい。</p> <p>研究教育拠点の構築については、北海道大学全体の戦略の中に、北方域の世界的研究の中核拠点の形成が挙げられ、拠点であるアイヌ・先住民センターは、北方圏を対象とした国際共同研究を推進する好条件の基盤を得ており、活動継続を保証するものと思える。それに答えうる成果を、残りの事業期間で実現されるよう期待する。また、オランダやスウェーデンなど相手国研究機関以外の海外の大学からの連携希望があるとのこと、喜ばしいことであ</p>

る。また、「ロシアとの大学間交流形成事業」プログラムが採択されたとのことであるが、ロシアのシベリアは、世界の北方圏のなかで大きな地域を占めており、また沿海州は北海道の隣接地域であって、北海道を考える上にも必須の地域である。この地域における調査や、研究機関との連携も、将来的に期待できるであろう。

以上のことから、本事業の最終目的である「世界水準の研究交流拠点」については、関係者の努力によって構築されつつあると判断されるが、組織的な整備に加え、核心となる研究の質の向上が人々を引きつけ、組織を持続させてゆくものである。本事業は人類史研究に普遍的な意味をもつスケールの大きなものであり、先住民文化について現代的な意味もある。本事業を発展的に継続し、この分野の研究が盛んになり、研究者数も多くなって、研究全体の向上に繋がれば喜ばしいことである。

1. これまでの交流を通じて得られた成果

観 点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 研究交流活動を通じて「学術的側面」「若手研究者の養成」「研究教育拠点の構築」の観点から成果があがっているか。</li> <li>・ 研究交流活動の成果として優れた研究業績が発表されているか。</li> <li>・ 研究交流活動の成果から発生した波及効果はあるか。</li> </ul>
--------	---

評 価

- 想定以上の成果があがっている。
- 概ね成果があがっている。
- ある程度成果があがっている。
- 成果があがっているとは言えない。

コメント

・ 研究交流活動を通じて「学術的側面」「若手研究者の養成」「研究教育拠点の構築」の観点から成果があがっているか。

学術的側面の成果：本事業期間の前半であり、蓄積系の人類-環境史関係の学問的成果を、直ちに多く求め過ぎるのは早急であるが、生活資源の家畜化、海洋適応、そして集団移住と拡散の関係が明らかになってきていることは、成果といえるであろう。論文については、一部目的とする内容とは距離があると思われるものも見受けられるが、自然系の動物関係の論文が国際誌に掲載されていることは評価できる。今後は、国際会議における発表の成果を可能な限り速やかに論文化する議論が必要であり、相手国の参加研究者との共著論文のアウトプットを増やす必要がある。また、研究のキーワードに先住性を追加したのは意味あることではあるが、本研究の方向性が広範囲に拡散することのないよう、本研究の目的に向かう何らかの収斂性を持ってすすめていただきたい。

若手研究者の育成：セミナーやフィールドスクールなどを通して人文・自然系の講義と合わせ研究交流が進捗している。若手研究者のポスト獲得も幾つか挙げられており、これらは若手研究者の育成の成果といえるであろう。ただし、論文ならびに学会発表は、ほとんどが教授・准教授が中心となっているように見受けられ、講師・助教・博士課程ならびに修士課程学生はシンポジウムに参加することに止まっている印象がある。

研究教育拠点の構築：相手国側のアルバータ大学、アバディーン大学との共同の交流はさかんに実施されている。また、本事業と北海道大学全体の戦略である北方域の世界的研究の中核拠点の形成という構想とがうまくかみ合っていると判断でき、研究教育拠点の構築は概ね成功していると思われる。

・ 研究交流活動の成果として優れた研究業績が発表されているか。

国際誌 Quaternary International に相手国カナダの研究者との共著論文が、動物の DNA 関係で掲載されるなど、業績リストによる限りは成果があがっているものと思われる。しかし中には、上黒岩遺跡関係のように、本事業ならではの研究内容といいきれるものばかりではないようにみえる。今後、本数を増やすとともに北方圏の人類史・人類誌関係における成果の論文化を早期に実現される必要があるだろう。

・ 研究交流活動の成果から発生した波及効果はあるか。

研究教育拠点構築の観点からは、連合王国で行われている共同講義プログラムに、フローニンゲン大学（オランダ）とウプサラ大学（スウェーデン）から共同実施の申し出があり、またカナダの大学を中心とした共同講義が予定されているとのことで、これらは波及効果といえるであろう。また、北海道大学の教育プログラム（RJE3 プログラム）との関係で、本事業をロシア圏の大学院生や若手研究者にも還元する可能性も広がった。

若手研究者育成の観点からは、北海道大学で准教授への昇任や、外国人招聘特任助教の配分が実現したことは、大きな成果といえるだろう。

## 2. 事業の実施状況

観点	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 研究交流目標達成に向けて、「共同研究」「セミナー」「研究者交流」を適切に計画し、実施しているか。</li><li>・ 国内外の拠点機関及び協力機関間の実施体制・協力体制等は適切であるか。</li><li>・ 研究交流活動の実施にあたり、適切に経費が執行されているか。</li><li>・ 相手国において交流を行うに十分なマッチングファンドが確保されているか。</li></ul>
----	---

評価
<p><input type="checkbox"/> 想定以上に効果的に実施されている。</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 概ね効果的に実施されている。</p> <p><input type="checkbox"/> ある程度効果的に実施されている。</p> <p><input type="checkbox"/> 効果的に実施されているとは言えない。</p>
コメント
<p>・ 研究交流目標達成に向けて、「共同研究」「セミナー」「研究者交流」を適切に計画し、実施しているか。</p> <p>多様な課題についてそれぞれ適切に実施されている。また、本事業以外の経費による招へいとも連動して、概ね効果的に実施されている。</p> <p>・ 国内外の拠点機関及び協力機関間の実施体制・協力体制等は適切であるか。</p> <p>北海道大学アイヌ・先住民研究センターが中心となり、全学的な協力体制を背景にアバディーン大学、アルバータ大学と実質的な実施・協力体制が整っており、概ね適切と考える。今後ロシアの研究機関とも協力体制を築くことができれば、さらによいと思う。</p> <p>・ 研究交流活動の実施にあたり、適切に経費が執行されているか。</p> <p>適切に執行されている。</p> <p>・ 相手国において交流を行うに十分なマッチングファンドが確保されているか。</p> <p>交流を行うに十分なマッチングファンドが確保されている。</p>

### 3. 今後の研究交流活動計画

観 点	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 目標達成に向けた計画が具体的であり、かつ実現性の高い内容となっているか。</li><li>・ 今後の課題がある場合には、それを検討し、適切に対応しているか。</li><li>・ 経費支給期間終了後も、当該分野における国際研究教育拠点として継続的な活動を行うネットワーク構築が期待できるか。</li></ul>
-----	--

評 価
<input type="checkbox"/> 想定以上の成果が期待できる。 <input checked="" type="checkbox"/> 概ね成果が期待できる。 <input type="checkbox"/> ある程度成果が期待できる。 <input type="checkbox"/> 成果が期待できない。
コメント
<p>・ 目標達成に向けた計画が具体的であり、かつ実現性の高い内容となっているか。</p> <p>具体的で、実現性もあると考えられる。</p> <p>共同研究は2種（R-1, R-2）あり、それぞれ1）ヨーロッパ考古学、2）国際狩猟採集民会議、3）世界考古学会議、で成果報告をおこなう枠組みが予定されている。海外拠点研究機関との連携は北大の事業との連携で、より安定した教育プログラムとして運用可能である。</p> <p>各セミナーについては、具体的な成果が期待されるが、事業全体として掲げる内容と各セミナーで行われる内容がそれぞれ独立した関係にあるように見受けられる面もあるので、これをどのように総合化し収斂させるのかは後半の課題ではないだろうか。</p> <p>・ 今後の課題がある場合には、それを検討し、適切に対応しているか。</p> <p>1）研究交流の双方向性、2）連携研究機関の拡大、3）若手の派遣と受け入れ、について対応策が示されており、概ね適切に対応していると考ええる。</p> <p>ただし、本事業期間内で解決できる問題と今後の展開による事項を整理する必要もあるのではないか。例えば、1）について、北大-カナダ、北大-連合王国、だけでなくカナダ-連合王国間の研究交流が進むよう努めると書かれているが、本事業期間内に実現させるのは現実的でないようにも感じられる。</p> <p>・ 経費支給期間終了後も、当該分野における国際研究教育拠点として継続的な活動を行うネットワーク構築が期待できるか。</p> <p>北海道大学において北方圏の研究が重点領域と位置づけられ、大学全体の取り組みとし</p>

て、「世界展開力強化事業ロシアとの大学間交流形成支援」に採択され、北極域研究センターも設立している。この点においては拠点の継続的構築を期待できる。

国外の大学との協力関係も継続していくようであるが、さらなる発展に向けて、国際研究教育機会提供の場を超えた学術レベルへの取り組みも必要ではないかと考えられる。アイヌ・先住民研究センターは、日本では唯一の北方先住民研究拠点であるが、世界では数ある研究センターの中の一つでもあろうから、当初掲げた目的に対応するキーワードを生かしつつ、北海道ならではのテーマの明示化を図り、他の研究組織との差別化をはかることで、この分野における研究教育拠点としての活動を継続することを期待する。